【７】

或日は、音にをれた私に、

「こゝは、いゝところですぞ。はとても日がよく當つてかい。それにはしいのぢや。は月がとてもよくさす。音さまの道場ぢやよ」

と、音を一くさりやるのであつた。とすべき場所は半ほどもあらうか、人がをまげてやつとれかゝれるだけのさしかないのだ。まあとつたら間違ひはない。

「事はどうなさるのですか」

「いつもひもじいからいつもおいしい。ひもじい時にたべるものだからになつてしまつてな、氣なんかになりつこはない。になるものもありませぬわい、はつははつは」

私ももらひひをしたものだ。

それから數日後である。先寺の耘大が學人二人をつれて、私を天寺に訪ねたので、私はを音に内した。も黄昏時であつたが、は三合入りの、たちがよく下げて歩くやうな、金をつけたブリキ罐に水をんで來るところであつた。

「この方です」

と私が人を指したら、耘は合して額が地べたに着く丁におをしながら、

「先寺のでございます」

と名つた。

「あゝ左様で。これはこれはい知の方で」

老人はをする心持ちではあつたやうだが、それ以上まげるを持たぬのでを何度も振るやうな眞をするのであつた。

「水のをにばせて下さい」

と耘が人の手からを取らうとすると、

「いやいや、これはの力でべるのさでごわす」

とつて、人はそれを許さなかつた。

「和さま、先寺に來てゐらつしやつては何でせう。非おしをひます」

「いやいや。は御の通りの軀でとしての勤行も出來ず、また自分で自分のを淨めることも出來ねば、道場内にゐるのは勿ないことで、たゞお寺の鐘ののくところにゐれば、それだけでありがたいとつとるのでごわす」

耘が何に重にめてもはいつかなき入れなかつた。

「和さま。も一度娑へ、おりをひます」

と耘が申し入れると、人はしばらくへるやうであつたが

「どうなることか、まだ解りませぬ」

と答へて、音さしてよちよち歩き出すのであつた。

　のつゝじは今がさかりである。ぢつと耳をすましてゐれば、高麗鶯や、巫鳥（五色雲雀ともいふさうだ）の清々しいもこえて來る。（をはり）（『京城日報』1940年5月24日）